丹鶴叢書

草根集 六

和書門 類
二九三六四 號
一〇八 函
一二 架
一五四 冊

内閣文庫
和書 類
二九三六四 號
一五四 冊
二六 函
一一 架

内閣文庫
番號 和 29364
冊數 154(61)
函號 216 2

図書局文庫
文部省文庫印
神祇官文庫印
昌平坂學問所図書印
内 一二九三

草根集第六

恋部

次第不同

初恋

わかるゝとハの三わいつましらぬ山路の烟たえん　小異

つゐに見る恋の花の雲霧はまよふのこゝろもちるとも

かゝる言はいまやその袖の杖ふくゝもまとふことのおもひを

涙ゆるむいろともしらぬ紅の一しほ衣しらぬ涙にて

異ナシ　まだしらぬ恋路の末はむかしより見し人そくるしき

あるさきぬくはこともしらぬまにたえまつとや出ぬるゝ涙

涙のみふる袖の露はまたよしまう袖のぬれ衣の色八分へ

まだあらぬ袖かぬれのなかよしむとすゝきの様をやしむ

逢恋

思ふにはあふさきもむ秋の田に袖ひぬ袖をたち神もうくらめ
いかにせむなかなかなれやさよ衣かさねてあふよその漁火
よにはかはよしむすひをちきりてこの世にも中の浅つ瀬
夏よりもなさけにあひてぞいまも思ひは神なつくしみれは
あふまてはいへにおもひかけまくもみさつつ夏のゆふまのせ
よにはたはらるもちかしいのちしなはこそ人をもあかれ逢て
少なからぬまてにしはしまつとまて思はさらすかへるみえぬる

経年恋

数ならは待よなき中の我ためにかくはかへる年やへるらむ

待恋

待とはぬまてしはしも偽のまことはゆふへの鳥乃なくねの
月まつと人にはいひて中々にそのよのそらにまちてこそまたん

別恋

待わひしことはおもはてわかれては日もやかくはえぬ間の中に
まちわひし人の袂にの枕もよひともむねをかきつくしてまつ
あさつゆに袖の別の月にぞ我さへせつをもちぎりしく
あかつきのさきにまたへつらく夜あひ見る命かな
草も木もおもひなかるゝぬさてなきてらん衣のきぬのあさち
朝鳥の羽風なちてるとぬくよるのゝ夜のあけぬも
ちきりしとてむすふる衣のしろたへにそへるるま黒髪

舊恋

衣のちきりかみや袂に床の涙もわきてあまるもの
誰か袂袖のなみたのあとの露草の袂そかはくまもなき
契しもなさくとまつてそのそらかへりぬ誰をのこなる

見恋（忍失）　見てもまた君は朝日の新なきやさしむかへもえぬ涙こそおほく
志のふとはさうにもたえぬ寸もあまたまされぬ袖そ朽ぬ
命もまたさそはぬみのうれなくて南の風にかゝる名そうきを
めかくる浪をそへしに匠人のみなをまれなれ網のこゝ風
おほかたのめをうらかつる人もあまぬ思ひのたえそ払ひけり

適来帰恋　そのまゝの名をしのおもとまたれたるもまたはなそこともかぬ

隠名恋　なるぬなに逢ぬのまなきは宿もとはいふぬまたなくそなる袖
まのはらにつてさぬやはてとものまの扇にかさむ月影

隔河恋　思川むかひの岸にまてしく船なくしはる氷のこゝろさを（ころ失）

閑居恋　こゝまでもやんめぬる宿なくして松乃思ひまたしもまたしのこ

子根

多年まつよはまなに雨新のたつかなしぬをいかに嵐のみね

卜恋　浪のうへうき木の亀地よりも下の名をしまひかに結ぶらん

尋恋　まの東にたてたる玉露をちらし人のゆふての秋風そ吹
まへて宿のつまなしるもつく名ぬ涙にまそうつ
いつやかるまこと小延きの（の失）子なりまち夜のこるめ斗ハ

悔恋　思川かいのやうらひつてあたいし涙に袖の川のみ
むつてをはさそうもまたさる秋の葉の後そ悔しき

深更帰恋　明ぬよの声を恨るきぬ〳〵ふうたてや月乃傾くなさ

帰無書恋　胡なるよぬまたそうしみなくその友に忘れて袖やぬれん（忘ん）

隠在所恋　こゝもかのまなとなしよをそこふかくしまのかたことやかぬ

老後初恋　手にとらてたてもなく玉箒ちりと積りし年もさは

幼恋　よつあまへ契しまてハかるきりとそ総角の年の思ひを

浅初恋　なほ風あらやまの下にうつりもくもいはぬはかなん

おもあれや思ひそそめし袖ゆゑに今さらのみつまかふかくぬる

聞恋　流るくの名もまさるくも秋やうつろふあらはしくの下かな　ふるめる異一本

互聞恋　横の雲のうき形を萩の葉のこゝろにしめし中川の宿

契恋　さりとも契をかなく松山のなみこす浦のむまの白浪

契あらく契なしとも忘れなくみしいはゆ世のならひそ

世のけく契りの秋を思やれハ人のつらさにをりや果はし

異ナシ
いとまるもくるゝ夕まぐれ我や世々の契の末の秋かせ

久契恋　我もまた定めぬ人もなとききのうの契のつまにぬまのなに

契言恋　いつまでも思ひさうのことのはにかゝるいのちも君ならなれゆら

初逢恋　命をもなをとてもいさハ根草んにハ秋とならぬよの夢の契に

稀恋　小萩衣うかつるまれに逢みても又逢中にある契かな

毎夕待恋　風さらく我夕暮の宿の松に待ちまんのこそなかなかかね　ぬる異

後朝恋　わくらきの事とまちくるまを待つとひしくにわの浅の床に消めや

かかつる我のきり原の霧雲の別のさへもけぬるつゆあさき　う異

そのまに此夕まてと契りはハ松門をのしむるよ袖さ

なかくらにいはるさハいつとや知るハ心のとまんとれさぬ

顕恋　さよ衣中の契のうきを袖に見ゆるのつまにあるさ身をそ恨る

つれなさ袖のうれさいつとなく世の中をこえかへりなん
うきこゝろつほとやハあらし衣くの袖つるえも人ハあらしさ
更るよの夢よかく那し哉さ人あさハの野辺の露の秋風
浅まりやうきなか立のさわりてもとえにける二重の帯
とみえく人の枕せ有まをしむ涙まかの衣下の衣に
みる人のめまくつほまそいつのまにむねまも錦か標かなん
めくる秋の藻のかきほのた一重ハ何のへ立てもあ北哉ふ

遠恋　ちのひちく入江の小舟あまま遠き漕出て涙まぬるゝ袖かな
かんちくらぬ我ま中たのもいくせんすつらぬおき枕まゝ一舟人
只への思ひの色を告やうハ花や紅葉のにやなてそ

くゝる本

子枕

こゝろ乱れ乱れてむすつ涙やはハ寄る程ハ雲居の月ま露らん

暁恋　暁霜のちつしめ由よ夢路をやまさみめくに枕かゝるらん

朝恋　袖ままちむ移すてさくこ別れ文え涙る色の川浪
はすか小枝やきくれ我袖さへひもかくくむすふ泡ゆく

さ本

昼恋　たのむ秋の今日のむつのあふさへ恋しけハ時の移るく今さ
さよ中もかくやハかつらし人ハ我のまねもなもこさ涙を恋つ
いそくらん恋の山路をのる日の影くらくさき嶺の松風
思ひともうき中なつよかくさて川くるる我の哀れの天雲
まち佗ぬ秋のいさめ持たる袖の色えてされ宵く待と

ゆ本

夕恋　夕暮ハ恋しき恋の時そとや人さら袖むすふ庭の松せ

夜恋 ぬるよなきまくらのかはきもたゝ方のこひしぬれなほまさるらん

契待恋 ちきりしもこゝろは誰の袖なれは待夜のかすにまちつらむ
おく霜の衾寒くも人はあはんと思ひしはむなしや宿の松風

稀逢恋 かはしても嘆くの夜半ふるかことの玉かつら中はさてふりし人は思ひきや
石とふるきおもをたとるとも人乃ちつる道のおくの中道

詞和不逢恋 我そこひたのめし人のことのはにつゆかゝるやまの下の松のふかきおもひを
思ひそなきむくに似かることの葉も八类たまにむなしきものゝうらみか

馴不逢恋 なれそめし玉簾のへたてもちかく手をとりて此の夜の乱れを
見る宵よはなくも人の黒髪をすみのけなくまつる枕かな
つれなさはかはらぬなかむなしくもうれなきもの木枯の風

よのつねの人よりまさる思ひのいろやかはりゆくらむ

恨不逢恋 くやしくもうらみハいつのあまりにてあはぬ風の身にさはるらん
古への女神男神のちきりまてあふこひのことことを祈らはや

祈恋 何事も人やうらみてうらみても思ふにやすらふハおもひたへのみ
神ならけふ人をつれなき我恋もうらみにやみたるらん
思ひ移の枕のちきりふかきもあはれをそへて神やまもらん
此の世をも祈るなかきハ月まつと人はいふとも後の世の為
我氏の神もあはれむ子の為につれなき人のこゝろもかなよ
家ささえこそ深きこの露けき人ハ祈りつれそあまたなるらん
うき世にハ何ハかりのまちはる恋をしかうて神もうらみし

恨恋　あまのかるもにすむ虫といつはらん我身とこそはうらみはてゝは
こゝろからうきみつしのおもひもたえてさらぬ袖のしからみ
思ふ宗の庭のあさちにひやかさぬつれなきよしあはれと思へは
くす葛ハ何のうら葉もやらぬ秋の恨そかきりなかりつる
恨ても我をあはれのせきになきやすめつのよその海かな
夕千鳥なく音のうらはあはれしる鳴音は伊勢よしほの浦波
かゝるをこえむ人は風ならてやしる身とてもつらき毎ハ秋の恋哉
恋の住里のあるへやうちとけしたまとハなくて絶ゆるも
うれ中ハ秋のおもひの日し枝に及ふ人そある葛の下風　と哀 一本
うらみれよえんしぬよのまゝくらしても思ハ八十の身そうし　一本
まつさそふ身をうら風にたゝよひてたゆ月にうかふ船そうきこと

恨偽恋　思ひきやたのめし人のさもあらぬ偽に露もかゝれとは
たえ絶て袖の涙の玉そちるかゝるまつりし思ひそめけむ
恨身恋　立かへる恨よむすほるともとめてしきのうらみのこゝろなきかな
秋はてゝ物思ひそめし下葉まてむすほれつゝ露も涙
くもゐよりやかましのうらをかとして末葉の露そ雨に増さる
世のうさも人のつらさも身のむかしあはれとそ思ひつゝほし
絶恋　ゆき別し昔をつらき中絶る契のまゝに乃しけのさまを
うき中はむかしにかはる水鳥のうきをみえし雲もたえて
袖ぬらしてくらす日のひなきとこぬやうれし名乃みなる世の露　子哭
氷ぬるぬまの涙のなみたにこゝろの床をさらしなし

恋

恋　人をこふる宵の月のかけならはさらぬ秋の心さへ
みえもせぬ面影にしやあらぬ世にすまは人におもひかへまし
忘れしはいはれは捨しいとの身をまかせてや心のかはらぬ
契しはいとき山峰のうらにかはるへき物かは忘るゝ常の誓ひは
まかせしもみなもあはれの物ゆゑ忘れぬ露は袖にのみ

冬

恋　ことはりの宵はかしもおもへる松の葉の色かはらぬこそあはれなりて
かゝるこそ思ひ初めし時ならはいつの年にはさてこそ忘れし
うき中はめくる年のをとこふる思ひをかけて世かはるとも

春

恋　月もみえかりとや思ふらむやよ霞の袖にくちぬ世まて
みをまつうゑしれたとみえて待ちかねてうらみあかしゝ夜の月

夏

まとろまぬやみのうちはしらせんかつて枯むしつゆしまその蛍ふ
恋　蓮葉の露をそれと思ひ捨つゝに思ひすては宿のかよひち
契しもすゑ秋の身の小河衣うらみのつる我さへそうき
故きみの子をとおもはぬ蛍こめてむすふ心の行方もはし

秋

恋　秋そうき人はおとさぬ夜のうらみの月もおもえつゝ
いろ深き人の秋風おとしもきえ衣の身をこるゝまて
身むつをとその世の秋よ来る時は待たぬ夕暮の月
こそこそうらみの秋の袖の露のうへとて捨はぬ
さしすらき秋や人をかさぬ恨かけてつるゝ人のむすま
身と秋のならは草の袖まかいとよかるゝやかくのかよひち

冬恋

待えぬ涙ゐる月のおもみまりく人のいとふぬ夜の寝の夜
葉を我くのと涙ちりの霜の下葉のよなかしくもぬる
ちるをとこそあまりうつめやとあはれあまとぬる袖床の霜
涙川袖の氷の関さえてあふ日はかたきあふさかの宿

忍恋

いそしかりのとつせをくまなくもろ人へしちらし涙
風そのぬくの知らしおはす袖あるともつむるとやちりまし
うち中をみしゐるさまぶ川つ人も知らさ字へつて恋侘ん
思ふおりんをしむる妻てめいまく秘をこさと涙のやへのうき
うちこらひて寝まこさあの上の白雲はあらき人まあらい待つ一し
涙まして思ふ恋ハいふともこ涙さそれ袖まよふせく

逢不逢恋

あかつきは涙に袖をしほるらむ君もかへるや
立かへりてみまあふ坂の葉をもいさちるの霜のあれ風
下もかりとく秋あくてや行果ん結ひしまくの上やらの秋
とされみしその世の月の影めくりてこそ袖よな衣ぬれん
みえなき恋やゆめよあをとはしさらしにかいそのむかし涙
あふ坂をとふ雲るらしもたち重あさの名をもちとくめん
とめぬへのそは月よ影めくりまきてぬるよの味おもらむ

増思恋

かさやしむ思ひかへの下葉ハなかとのはあるの大和ちらこの里

逐日増恋

床をうく涙をしる世のあまた日は田の沢のうきさふ

依忍増恋

思ひ川もらさく氷のやるく涌ぬられそのさりぬるとき

境外恋　しらぬ人によるゆん袖と宿の松その里ならぬ名なりとも

聞声忍恋　宿とへはやすてやめつる袖の音に我も袂せてこゑそやはらく

人のきく音こそまされをかくしは耳のよそにやなりてこえん

忍親眠恋　秋ならぬ思ひの杜のかへしくさ露もつゝむる枝よりも落

後朝見書恋　あかきつる枕の下の水くきにかよふも清る鳥の跡かな

不逢恋　身をつくしむつくつとさそふに書のまきまくる人にあふよしもなき

逢ふをさそふもいのちにかへて袖よかへしと人やつれなき

恋つゝむ心のうちかくしを枕より流よるたもとの衣もぬるゝ

今よりも浮よりすゝてあはれし人のうきも涙の名にそさき

なき人なきを思ひやせむさへよりて文見は捨つれ世のうきの世

木葉ちるえまさにぬれは秋のけふいかし一年の袖の色なる

ことをうふらうつにをよ恋しき身のおくらいともしよらし

世もくるる人もあはれをとへは成る時しも涼き恋そくさき

葉おもおもは人おもにしせをいはもたへし袖の色かさ

従門帰恋　おのれの身のつるもちては庭中のきはつらく萬の風

雨くらさえぬきつるをかとなるおもしちりて文かきらん

海邉恋　よもすからいかなつしは小舟こきぬきしまつくをは恋るおもしろ

等思両人恋　我人のひとりもせは車のまへくあはれにめくりてあひてむ

来不留恋　まつあつつとまるちかこの涼あるとのはおく宿の宵のくるさ

枯ぬるをたよりにひくも萬のものかへる葉そまの秋かせ

片思　ちゝつむもなくくるしきさてのこやあまのさそのつなき鳥
のこむやなき人はあはましはきなみならき底のみくまつらも

忍恋　思ひ川たえず舟のしきみつゝ心をせつめてや浦よせられん
あきぬまを待恋うとかくて心えしらぬわたる人

思恋　うき中はなかはし思ふ身によそてはかしくやらぬ人

近恋　隔てたる（つのなる类）家よりちかき内のみすも袖は袖まかせしられて
かすかなる袂もつゆしほる人のよその衣のしほりたるかな

旅恋　やすらはじ見る夢さへのはかなくの床の嵐かな
さすらなんおもかし旅の月にこそ思ひ（色类）こえしよそのかた
浪（も类）まくらしやかくらん思ひ枕思はぬ旅の道乃ちきりに

時よ恋つくさかくみのうき風は袖にも月乃おさまつしられ

見手跡恋　なかなかも女のたちしとはかなく水くきのあとさき葉もあらてふみぬ

見形厭恋　其さへ浮きぬるをまたおくや君のまつむ花のかけさせ
かつらぬるや後らの見るめよしをなきぬ浪のかた（や）てしらき

纔見恋　のひきし浪まふりえくられるのよふゆぬ浪のよそめ中は

偽恋　うつもなく思ふ子ころや偽のあるよそまてむくん身をも
偽とさのうみるは一つひのまこと（もと类）まてしもいつわりきさん
身をさえしは思ふなる偽もある世なくは袖やうらん

厭恋　こよかくふうしは業さきさ中にこえる我身や人のうき世なるらん
知るころもいひの上は又うしつまふなしてこそ人のまたさかりけり

むさしのゝおもひしかはいまもゆふ浪のゆくゑふかき
情なく浪にこゆるきさ世の中をも人のいさみよしらく
いつはるに世をうきはてし思ひかはるはまゝふかし

変恋　さやかにも契りしいもをかはるうきよ
まことにもさらに我をそなくなるゆくへ小床をまくら

人傳恋　月まつといふ人にいひしみち(ち)にやさしきん

被返書恋　うかへぞ文まつるもとのまゝ氷のうらにかへるとつ

立名恋　ともの花のにほひも契りてやこそのあらきたをあふらん
まちえたる花のなきかなやふ夕やとのゆる橘の橘をと
咲そうき玉江のあしのこゝもなにはあめ世戸の下風

ちぎりてもなほさだめなき世の中はうきをさまたつの市人

負恋　つれなくもあふさかしのさき人ぞ目あてにみをれ乃かけ
ちぎりおくのわたる小舟のさしもやは人はのちよかかる川浪

欲忘恋　忘らればむかしをわすれ人の我なのことをかなしむらん

歎無名恋　ちぎりこし名のたち待ちよ鳴るの浪かなしきそ風そふく
中々にうき涙なき夜やさてふかきのかゝるをかくる白浪

契経年恋　たのむ世のちぎりはいつか石と動の杖もかはらし神杉

山家恋　関もなし人は忍ぶも入ぬ世の山路もわかき松の下風

契後変恋　かはるなとそのつまひのらんは結び契の下なるらん

契別恋　いまを結び契のかぎりはしてかひのまぬ乃そら

契久恋　小篠原のもとやまさとのさゝちさ枕かはらぬ契りて

変契恋　ふかゝりし契もいまはかれかれにかはるらん人の心の契りは

春忍恋　かすみこめおくのしのふるまつもとのもまつに乃ちさ

夏顕恋　名をはまつふる禍とのかはさおちらす川岸の夏のよの月

人の名もいはてかくさん夏衣あつきはうすき契も

秋顕恋　名立川人の契のあさ霧は絶て流るゝもとの埋木

冬顕恋　しもうしおし雪の契さへ霜おく庭の松の枝

絶後悔恋　かねてなき玉のをとのをしき絶てはさへおもふ嵐の風

絶不知恋　都鳥なけく人のあとをたつねてもいまは幻ものな

憑人妻恋　身をいかにたのみこむるの山越て向ふ浜の名と契りのこる

東屋もたのまぬよその人妻よしたのみをかくる雨のふる

憑媒恋　袖ちかき露をつらしと同し野の篠の原のをちの花

待つるもまたさはらぬ瀬をいつはわれなき中川のみを

名所恋　里の名も我身のうへにしられぬる中川の長

祈難逢恋　かつらきの神のちかひもなに人のつれなさをいのる

秋恨恋　ちかひしいはれ神風に秋のあはれいさの萬しそかるらむ

不来恨恋　待つる萬葉も楢の秋のこゑをてこそさらんとおもはれは松風の人

人伝恨恋　つたへきくなるみの浦のうらみつゝうらみもとの風のたよりをまよ

たのめてはいまぬるの渓のせかれしたえまよりそ人くる貝

枝もとの秋ふかきのかけ萬葉のもふかくてつゆやさし風もの人

連夜待恋　小篷ふよつ秋ハのよそぬ契をまちぬる夜の数ぞふらん

乍立待恋　あやしあん人まつとてたゝずみて秋ハ月もなかなかおもふらく

不堪待恋　いりむかひあまん涙を夜々の床にしなりくる空やのこりて

待空恋　こぬ夜のゆきハむなしよせごとをもらくくのたそがれた起

顕涙恋　えならぬ涙かくさのあやしさをみしまれるさまにも人をおもはめく

顕後悔恋　芦の袖のくあまさをも流しもしかくる入江のちかひもうらめし

かくやとさきにみる涙よしほ天の網にも出るまゝのうら風

螢とておつるくゆきのさへある未曾の袖ろるかや

秋厭恋　秋の夜の也をかこつ人に袖の枕なくしてそのえに涙し

互恨絶恋　つらさ名のこゝを男床のむすびけるめでられ以思ひの葛葉

無隙恋　おも影の文やハさのみかよふまんつまなにいかにその秋の世

惜別恋　まてしばしかへさんとする袖の袂をみよとてぬるゝ枕の石そ

篠かるもるをとこはみせ清く命をむすぶるさぬの露（衰類）

秋切恋　立使ぬ秋しんをつらきものあへそめ川よ身をやせてまし

心中恨恋　ほとにせる時ハあまた袖もしらさきみてゐの芦の下根を

忍久恋　つらさそて沖つ白なみのつる袖よしも人の涙の露ハあまりさ

増恋　身をしめて只ひとへの花さく胸をそそぐる袖乃たまるさめ

不見書恋　さのなきそらおもふ鳥の涙をさへてをぬさ河の身をとくらん

非心離恋　ぬさ川や涙むせなるぬれ衣入られたるちぎりのおやさくる妻

逢夢恋　身をかくるゆめ也けるなれば人のうつゝよも似ぬなゝよそさえ

待便恋　来ずとも君かよするをたのむひの道にたよりふみぬるよすか

尋縁恋　廻ても小舟ちかき浦をとはゝみつやなきさの江にも寄るへ

適逢恋　くれぬ文露も涙も袖に入まさかならぬ契ともかな

恨絶恋　契しはかはる心の山風によそなる峯の松そつれなき

難忘恋　まちわひし思ひ捨るを倍まくとしてふるさとの雲の井

忍来恋　柴の戸にさゝふ袖のまやしるさとしらねむねのさかはる

乍見隠恋　こゝろあらはなみのうへにかぬらんうきみかくもの鳴乃下そ

枕とそ雲井かまにやのまに涙のあるそれ月のかきさよ

逢後不逢恋　人ハ知くてもゆかぬあふ坂をとへえてまさこぬつらめいしふて

祈逢恋　露かともいそとまちるまへ舟川袖よくる汁し涙のたつまゐ

恋　身のうさを思ひしるとて恨もへ人のへのかにはなさはし

忍忘恋　露やちる思ふあらぬをたつてふかなぬ日はなし　そ奘き旦

河邊恋　せきとても寄るそそく涙にもぬせ川との人をつまさきに

冬別恋　ふかぬる袖の氷のとけぬへしはむやうなるもし秋のもとし

逢恋　契ありて逢あけぬ身のかたにかゝるつた日にはなきめん

寄日恋　思ひつれはしめ庭にきぬ袖のかゝるや涙なるらむ

あさきさハ此日思る日かけるかけ思ひの関の涙そのせつ

いかにそれそのまの葉をと露と日就わきぬ思ひかはは

寄山恋　涙のそあけの袖もとゝぬ契くるゐ乃しるそ知ふのさき

絶えさきひかぬ世の身くれるの山下さこみなれよやこゝろん

弁のさはまのたゝの君かもとにせしあさもよし嵐そふく
別路よそれもなかくいつく梢の花てちりぬ二上乃山
とりてふれひかゆるもハはそてもあひつの山そなるけき

寄木恋

身をつくしこそや八ちひ梅のはなのまくるかやふちしかつらく
さのみ葉もくるしくんそ恋の山人はいさぬたつきあれ勿と
志らハたまちくらをおくらめなたつをもくまたれの憂しへさらん
いのちまふにしひの下葉し秋おもひもこそ帰し恨ん
流れそくの名そ川なる埋木ハあれ出てそ志つくとしあれ
まつとれきくまに恋や宿木のうきぬしいのた稀しなくまく

寄鳥恋

かるのこもさみてかうきの思ひもや玉もの床にまうちかぬらん

山桜やさそひもつらんさきのあさまやいかて袖の別路
ゆるさんはよかる八こゑの鳥かなく東路なるぬ中乃葬も
思ひ江よ思ひハよもむかるのその世まくもを小室もさむつ
呼る鳥のなを申斗もさるかれのもしむかつる名つき暁の空
飛鳥の跡もうめしもとをこそのうつるなれ中の契に
ゆめまとを待まなく鳥に申付く旅さやつくさお坂乃関
人めもを志らみまこえいのかるのおもな新はる袖てもおもを旅
園のまの秋のまに後く待人ハちてそこの鳥のあそかさふる
人ハやのさその月をあなく姫を人思わの雨ふつくさ中れ
我しさもかくしや庭の石まさまそくんハみえん世し遠

たのみし逢我を月もさそふかんさも足くまる四方のせむをや
とつまなくも待のむかしつむ月のはさぬ人乃のこみを
忘てぬ涙のうちしれおもかけも袖よとるるあるはの月
袖の上ハ涙も我もそひてつゝほのかに人をみつの夜の月
おもかけのこみのそふかはる月我ともしまでかへる我はまさ
人とゝ待つ別の二ちもふとみちをくも月とはをる
見れのまたつむのてかへてなさきいむて月も抱きやしく
侍もるよもの契のたのみも人月のこゝやいのおくのこし語
西影よ文やこゝまでもさもさも世の月の後の涙乃
くも我人月ハさ作しもさしむの子んをとつるを我もみするほし

かゝらむし我床を払ひてこそや待しとみるもかなめり
暁をまつ程にこそぬ鳥の子のかれあるよその契ともかな
うき年ハ秋にたのむのしのゝめる我の床世とおなし契を
妹とおもひし程よそ忘こそハまたかるのそらやまるに

寄衣恋

あはれさぬ衣のむし恋おやの上しくまさに忘とも今を
かよひてハの民との浦つてひ夏済よ人や袖ぬらし花降
夏衣は人我あひぬみ山我たのあなんぬる月とかし侘て
別もしらぬあはうつ乃蓑衣まつるよそのかくまふ近済

寄月恋

まちむ月も我世の人のうきへをかくそ恋済よ将めくるらん
流くの月まつよをやかさぬらん首をとも川の末の里人

寄雲恋　いつせんとまてるもせの空むらくものまゝにかゝる恋路をと
雨とならまし袖もあはれなるさへも涙まさる涙の外
思ひ出よそよしみのつまとめにならし八重の雲乃川のみ

寄雨恋　もろしのる風まも人をまちをしとちるはなつきさそ春の雨
いつか我のめくみあまぬつゆをハ雨我の名によそにめくらむ
雨も音羽よおもひある水の涙とぬれし清ぬ思ひ子
思ひきや我人ハやそていつもしき雲の身まさる袖の涙を

寄煙恋　恋つなく人を烟とみをなさんせめてそハいつかも思は
うきなからつみをあつまの富士のねてたえぬ煙の月
たつとてもかひなき空のやまのる神にたちてぬる我の烟を

身をまつる恋ことゝゝとハ富士の嶺の烟の空のたくひも

寄関恋　あふ坂人のまちつめゆるくもられ川口の関のくまぬき

寄滝恋　袖ことく石さへくるをハさそ我た瀬つくのきかれはさらし　せ炎

寄橋恋　たえてまろたのむも舟の一ことも神をそかくしくあれ橋
かよひしも絶なる跡ハくさのゝつる橋の我の神家

寄湊恋　翠のゝもちし袖のあはれにまちしかよはぬ瀬の我舟
人しらてもやみなの湊舟よるとつゐにむさゝのゝうち寄

寄草恋　うき身よる涙の草葉に結ぶ清くハのつゆやよの通路
侍人ハことゝわすれることよそにやまんくさくさのゝ夕風
我のまよひも我恋草とのたえ清くて今しあさハやちらん

寄獣恋　浮ふしきまことぬかよふまとむ虎のいのちあるものと思ひしる
つれなきぬしの鶉もおもひくさにしつゝもまきる月日に
夕暮は思ふこゝろもいとゞむすぼゝぬる床のうちにて風にねも
寄虫恋　いつの世よりむすびそめけんまくらもとおもへる秋のまつむしを
世の中にうきことあまた八つはしそのまゝとくまでをのこさみやまのく
くるしむ篠川に舟をつなむさのまゝにさきつゝくゝり
源川きくかなしきまゝのよるを清るあしろ木もなし
寄玉恋　あらぬまの神の白玉かくもくに清くなつかしきよその小筵
うき中はくだけくたまさかる我なからぬその玉の数なさ
寄鏡恋　我なからむかふ鏡の見えてはいかにまれなる人をおもふらん

まんのみ影をぬらしに見るもの影よふは空にやつらむ
影をまくをこの袖見よ影さえいはまに山あるも。いかにつけてせ
思ひつゝさかみの霜よむる唐の中のたは見なきらなきを
拙見て我おもふ人をあまくまに鏡のかけのつりて見ぬる
鏡をみえいはゞなきさ思ひを鏡よりつきそふいのちもなし
手のうちにかゝさえこゝのかゞみよもられ見るに佐る影ぞ見えぬ
まんのみそゝるやさしみうしくにのけりなきぬ涙もうれ
思ひを我から鏡あふにむすぶのかゞみ乃影そやけて
寄枕恋　ちゞるまくら枕もまくらでは涙かしくに思ひよせまのみ
ゆきま文むとぬる袖のまくらにむすびのとこの鏡らん

寄弓恋　ゆるらめや人ハなにはにふかきの細川ならよるゝさつゝを

寄花忍恋　色なくしもの下ともちまちむもの心にこれくみえぬも風しらぶ

寄花契恋　たのめおく中の契も花の年つもりうつらぬよの袖の別路

寄花待恋　身まちへくかゝまつものゝまむもハとくともちて人をつくるさき

寄花朝恋　たち中の朝の色路のぬれも花を花も深きあかつきかをさむらん

寄花変恋　かはりかくも契し宿ハ色もうしろのまゝ花の雲の下そ

寄花顕恋　さぬしの色なしとも世によそにぬの花よかつうちしらせこの色路

寄花厭恋　人ならうつろふ花よまたさかるうつりや風のなさけなからん

寄花絶恋　袖ぬれし音のむかしのおもかげもなれる雲のよそに乃まち風

寄月忍恋　袖ぬるゝぬるゝ雲の浮路や思ふ子にも月のみるめをつむよハな

寄月顕恋　衣々の袖の月のかほよくにのけぬ涙を人のとふまく

寄月忘恋　忍ふよ夢よなせしハ絶よ我契らぬ物をとはまくて秋月

寄月見恋　君らくも月ハんてよみえてうつゝハのこし人乃面のけ　（に 異一本ハ同）

寄月不逢恋　もらしと行みる我もおもハ袖の上にまかさうらとも月や宿らん

寄秋風恋　露けちる人の心の秋よ風のやとりやあなかるらむ

寄露恋　萩の原ことをもむもしもちて露の清く文おく今なりしハ

我命露ときもも思ひのうきの数にや我もおもむ

恋草ハかつくりへさへなりて露乃こ秋の袖さへそちり　（ゑ 異）

うなゐ子やあまの苫屋の露もしらしなかりしハ恋やあふらん

寄山領恋　いぬきし山まちくむ思ひのある世とや絶えよしきの色かくれらん

寄山契恋
契りしもこのちきりのなかは我おもふしや恋の山のそ

寄海恋
恋の山かた九つをさへてとも人こそ八乃海をへたてゝん

契るとも名をもらしてあらぬくら恨む袖そつゆけき

かくのみ石見の海のうきめはかわらぬ波の松の志つ風

海よりもふかく神にちかひぬ思ひをややよるつて泪の床にふるらん よ歟

あかつきはなみをたへてまてれしあまたる世をもなき袖の海は

君こそし海の都の人ならはかゝるの床にみをやとつめむ

寄船恋
おくの海よ思ひくのもし船もまつて打出ぬ泪のうけしさ

さのみあとゝ見のうの泪に浮の帆綱くりしくるしむらん

たのむかのあまの世の船ちき別し人をかけき床の泪に

寄海人恋
小わかれ袖にみちひの塩なきをくらは救もくる日の延せくん

ちうくもる島の山のこつりはらくむ塩のめ世子の中に恋て

救なくぬ恨をふみよのしめてもいくらる延せのまてなき

寄海松恋
まるとは人の尻泪のかはらぬ江よ身をうつるるのえもかゝる

寄濱恋
泪もかくのまゝやいそうらきん人のゝのあゝき濱の秋

寄河恋
契しを人こそはそれやを川にさあろ木の身をくゝらん

まくらとまむつらひとかたりまくらんうかり水のちきり八 歟

寄帆恋
かきつくもや身をうら船の帆綱さへ人のゝのあくちらん

寄棹恋
袖ぬらしあまの釣棹さしもへくる行なる中それいくらき

みちよ棹む藻のうきめまさしきなかしらたよ船は泪も紋

みつしほやもみおもひつゝかたつ枝の浪の契はまそみけりさき

寄江恋　逢ことはなき世ごめし玉津島袖に入江の逢も見えらく

寄淵恋　深しる身しハなかなかに瀬絶ゆくはかなさにふちとなる川浪

寄原恋　しらなみぬ露を袖にうけくも身にそしめらる原の秋風

草の原に人をしゐらむ涙消えかゝりぬ月にやとるおもひのそ

草の原露ふかき涙もえにハみゆなる我を人にいひし

寄岡恋　このもとにかの岸ハさらにむごとく人めおもふの萱もう

ごもしもむゝ岡への松にいれやまる人しおもひけるを

夕日さしむもりひのおよ物にかさのごくとも花さぬ岡に袖そ

寄蘆恋　はるのかく東なかり世をなましと頼てめぐむ

寄藻恋　思川つゐに瀬による藻さへもとみよし浪にまかせむきやハきる

うき枕ふる涙にもつきもこゝろ忘れぬ磯の藻くづ

みるめかりみのひやなきはてて藻刈小舟の綱やあらん

寄萱恋　つれなきまゝ人まつのわハみだれてや萱乃あきはての

寄菅恋　いはとてもかくてなほ菅のかくてのこらぬ

寄芝恋　露よりも人のぬれて結そての世露のそこ

寄雪根恋　そこえぬらみをとも人心の雪のうつまふる雪

寄菊根恋　はなのさかりきと秋の菊うつろふ中にかくなしつらむ

寄思草恋　秋のそこにおもふる思草人こそ露をかくてやさしき

寄浅茅恋　人こそさ契あさぢの露よりるかの氷ハすみてつる世に

寄忘草恋 つれなくもわするゝくさの種となる松の名つらき住よしの岸

寄朽木恋 数ならぬ身のはてになりぬるは朽木のくちゆるあかし(字)

寄宿木恋 人はおもへ思ひに孫さへ松や孫思ひをつたへて世にかへす孫そ

寄塩木恋 もしほやく思ひの薪のつくる世の山をも我かさねまたつらき

寄松恋 (米ナシ)夕暮のまち人をこそ君は志賀にゆかんあふともまた山のはのまつ

(日)くれ毎にすむる心は身をつくす松とはきかし宿の林をせ

(日)おのつからわかれぬ身を松に葉をいのるとやする

(日)いまくらつきに心をそふ松よその緑の名のみしるく

寄杉恋 君をまつやとの木末の杉のえも思ひ思ふたくにまたのあらし

つれなくも思ひはまつ杉のはやめしこゝぬなるしみそれて

寄檜恋 月をまちし檜原の陰に住身ハ思ふハ神の御なかれや

寄槙恋 丹生川の(乃川一本)なかさぬしまきの槙もつひに世をおもへとそくたん

寄楢恋 身をそ思ふ住まつ人ハあしのうつろひ果る秋のみやこを

寄柞恋 たえぬ風ゆるさぬ舟のゆくへさきそめの柞のあきさそみた

寄桐恋 身をしむ心をこらぬ秋風に何そハつらき桐のもの(あるへき)

寄竹恋 うらめしやなかくもなをよ竹のおりても思ふ人の心ハ

とふ人の陰をめおく宿の竹乃一よに宿をたのみを

ますほかにたなひかまよふ身もいかにかこちもあらぬへまきはせ

たのみをきまつとも知らぬ竹のふしのよをまちきくかけのつゝ

寄篠恋 人ハこて風のさゝ原くさへおなし葉かくのそのさゝから

寄鳥恋　ちなみの新るよにてまさちのちるはなとのこゝろかく

結やなくまつ尾し焼へのくてつるちの新もみぬまゝに

寄朝恋　明ぬあらふ候よもまつあさをわちるしよ打とは津く

寄昼恋　めくるとあさもとくれに小車をかけし其の時も契りは

君つねちまのぬらまの時もあくなとそくかよふへそ

寄夕恋　みちとめや恋と夕の二つをせめくる宿をいそくかも

契まらんに夜の川もに数あるにちむく中の舟八

寄夜恋　さのみのくおきとものさしなの世を歎くく人ま人言はらん（やまひとゝん同上）

あちぬ世のつくさハ夢になさぬや閨のうつの語ある説

寄遊恋　待ちひもなかぬ妹が原き秋の風ちるをに宿あるる小遊の月

夜遊とゝ昔ハ人の話にふ説なつしみ我そのこゝろ

心むしろふちるとりおしくらをおもハくらくに人の手や拂ん

寄帯恋　いひもつぬ恋そくるときた下帯のわめくりてもあふさきるは

さしなのをよもそよやなまうん結ひえぬ契と石のおもひよかゝつ

寄衾恋　きつひをまさるかとよや川とらんてあふかかふに二あるの帯

まれかくひ衾の袖よをそしのものぬ色ひのあくハふる世に

寄錦恋　くちぬの原も人よ見こえぬやこの涙のよその色やと結に

寄裳恋　いとつれもあてふ世あていしろ手のうちもの涙のあまりんと

寄廻恋　袖のとえてふしてとうかまとそたゝまくしけ中よ入らむ

寄櫛恋　黒髪ふたまとくあしてられもてゆつのはは揺さしかくらん

あすよりハへんかきりしハちりてゆくおちくる桜のあかぬ匂ひを

みをもつくよそにちらせぬ妻桜ハたゝつ髪のかみひとかたならし

寄木結恋　うき中ハまさしのつまをたえやしかほのかにゆかりむ

寄春恋　うらみくハ契のまのあさき程に人してよそのまちのつれなさ

寄夏恋　まふかくし昔ハたゝ夜川のいはふもつらしき川のそこまて

寄秋恋　むかしこそ恋より秋と袖かく古き涙の露となるらん

寄歳暮恋　更けハなほしなるへの年さもやつもりなん年はまの年波

寄心恋　恋もてよそのあきの世あかなくにあらそハぬ我身なるらん

寄柱恋　よつもそむし柱そうみなれし衣くのまたきも稀かく

寄戸恋　山あ市にうたてなるとのたてあくと称ぬ人あハ中やとゝめむ

暁のわかれなくしや椿の葉にやどるこそハ出るいさよひの月

寄車恋　思ひつゝ月よやわかむ車にのする宿に旅をまつらむ

月ことに人ハつらさのむなし車口やりもさせへかせけらん

山里をたちかくれやすらひめて人ハいとなぬかくのみの宿

うしや形恋涙ハ思ひめくる涙も糸毛の車みつかれひて

君ふともんよもあらぬ人やうのみなちるさ小車の緒

寄笛恋　こゝちこゝぬこゝちそれいひて笛の名のこま人かよれ程やつらん

たつもぬうさ一すしや笛竹の末の世もさぬ称よはするらむ

寄琴恋　つれなくよあらむつましきたのをうつ聞しあつまよ乗むる調を

露かさの思ひそこなるまさての川瀬のつらをそよみかさ称と

あふ坂をこゆとてもむなしき中はまたきなかのせきもあらしとも

寄傀儡恋　思ひ出よ宿は野にこのすゑ毎に身をうる市女ことゆる世を

寄樵夫恋　休まんと思ひの薪こるかひもなく花のかげなきその山ひとを

うき身をこるなげきの中もいかで荷ぬ名こそ聞まくなし市柴

寄筏恋　筏おろす杣山川の岩やうみさわる浪のよるべさへ中々

寄猪恋　臥ゐのとこゑし床は猪の床中におきまさる頃原をわけつゝあらき

寄蛬恋　きりぎりす綾の糸ぐり衣手に乱れそめける袖の中乃秋風

寄鐘恋　人めもる暁の鐘のまどろまれ別路も頃はあはれなる鐘のおと

寄書恋　さよ衣うちもへだてぬ玉章をこひつゝも我や独まてしめん

寄繪恋　うつゝにはあふよしをなみかきもせじ偲ぶ思ひもかひやあらん

かへりこぬ人の命にかへぬ方にさんを流す津をさむ

寄煙恨恋　形見にとしりし里人のむかひ火はひとつれぬ宿のなかをを

寄花恋　花しもうき名はよそにちりの世のむかしあだなる色やまさらん

寄杜恋　思ふことはむら風の便もいかのいはせの杜のことのはも

寄蓑恋　我そくみをうらふる身のなきこのみのをつくさて乱れこし

寄塵恋　ほのかあ日影うるやふたつ見の人ことをちに来つらむ

寄蘋恋　人は浮ぎみをうきさすらふにくつも根のなきものをなほ

寄霞恋　中空に霞も思ひはれぬ花の色や春のほどにて

寄星恋　流れくの名こそあまつ星の影をまつまぢかくも

寄茅恋　氷まさる川への千代の契にあはぬ袖のなみうへをかへて

寄夢恋　時のまの枕もよ里にまとえぬ花かとも別しもしらぬ袖の夢

寄塵恋　涙のつもりてちりの積りよめ文字書ハつもりてみえけり　異本

寄鶯恋　いさやまて涙の谷もつらぬる主をとこにほひのうき世

寄雉恋　いつとてかしる坂をあふてこんゆふつけるのかすむそとかき小

雑部　次第不同

十七一本

暁天鶏　八こゑなくゆふつけ鳥の尾上まてもしるおるよハの穂空　異本

海路暮　船もふて追手の帆綱にはおろす夕浪をしらくにかる舟人

社頭祝　やまと民をなつけやや大ぬさの手向よろつ世まふむくらん
なかくへみよ神路の山のそこに川合のぬきの志むる社を

嶺上松　後世山松そそまつき梓のそのきよくへそ家のあくしたに

山　石走る滝なき山のさのへなる白玉椿千代の数のえ
まとへて山よんをかくし昔も思ひさえぬる古への白雲
姿さへけもしのぬや宮のみやこの宮ゑの山よるつくむ

古寺暁　小初瀬やくるるきゆつきの下も出てゆる尾上に月を傾く

暮山松　さむしさハをちのこる梢の夕日影ふとまさる松の一本

暮山松風　暮るふく嵐ハ松本さるをの鳴も絶てふる雲の世

暮林鳥宿　山本乃夕の雨まなく鳩のならし捐て雲のくま行く

あはれをもやしの島のむら松も一の枝にかゝるやまちる八

夕陽映島　夕日影やゝとてらんや島つたふのむらのまさるまでの川岸

淡路かたかすまの松の木のまより入日をいるゝ沖つしらなみの世

名所杣　えつ河もそのむかしもある路やまを杣山おろし嵐かな

名所海　うけよ神をろかにもそのなみさへつりに此浦にふせきぬ

名所浦　わかの浦のあしへのたつよ老の果く雲ゐのむかしにおよはぬ

そのかみを隔てゝそ忘れんわかの浦の延喜の昔木のよはひもあれ

名所野　草も木も筆をおこしてそあたへける生田の森の杜の川上

名所滝　いつよりも流れきえん日本も南はなちの滝の水のみ

白妙よなむく何の世もあまた落ちし布引の滝

雲ゐより落つる滝の…やはなまてるゝ…

山路苔　太山路は水はおとせて苔傳ふ流をふみてそまよひぬる

芦間鶴　磯の松入江のあしまにみえて汐干汐みちたつそなくなる

岩上松　うら風に松のたえそかゝるさやかにはまよ落る滝の白浪

山家松　世をいとふ我松の戸の出入もいまはなしにはてんとすなる

山家雨　松風も窓うつ雨にまぎれてわかれのなる谷のうき雲

山家燈　夜なきに山のうちともしびをあつめてもよるの光と影も窓に

あはれさ窓のさよとめ…大のせまてもまた嘆きのあ

山家氷　わかすみ山の下水なれども結ぶ夜をさえぬの住よにこ

人住ぬ山のかけひの丸木舟たえてあまる氷はおとしく

氷の上の山の下のはしてくるゝ雪をわくるあらしとこそ吹

山家鳥　庵も猶山のおくその夕(?)を我家鳩のこゑにしきのおし(?)
住まふ身をばしるやなれしならぬ山の鳥おのれをとつく

洲鶴　庭の池のせまき洲にすまふ鶴の千年を(?)とてる君(?)忠(?)　一本(?)

名所鶴　九みさき田子の島にあさるらん夕日にかゝる鶴の毛衣

鶴　子を思ふ鶴のよはひの二千年まておやのはぐゝめそらん(?)

島鶴　夕潮に秋の田の面をまかへてたてる島人まつに鶴の音(?)

古寺聞鐘　みを法にいりてきくるはあはれとも鐘波にや鐘てて寺の声とはなれ(?)

あめの葉はかゆる鐘波のまその言かはりしまゝぬ鐘の声かな(?)

古寺暁鐘　六る月夜もかへあきこもの寺さんやまてきあかつきの鐘(?)

夕鐘　そことしもしらぬ山のおくまでも先昔にとまるひゞき哉(?)
夕暮のくものいろと深くおく法の果るる鐘の声の白に(?)
しやゝ嶺の寺さえ鐘さえく夕のくらき山里(?)　こ尖一本(?)

野寺夕　夕霧にとうかれの田の中かくれなき寺ある草木を仏とやなる(?)

薄暮嵐　嶺の松さらにと身にしむ夕嵐ふりとの竹の音よおどろかぬ(?)

名所清水　月の船せるるにみゆる清水のこなたまでそ影りけり(?)

浦舟　うきぬまの追風たのむときの浦のむろの泊に舟やとすらん(?)
遠き江のうちこぎくるみをつくしたてる標によらる舟人(?)
浦風の名ぞるゝみえぬ浪の上の日影をおくる沖つふな人(?)
おいて舟五十年の浪よかゝるより日をへてよするこの浦風(?)

塩屋烟　朝夕の海へ塩をやくとかきりなくたつてもあへる松かうらしま
烟をハ松にまかせていまのみ文字するなきの塩やき

残月越関　何よ入影も山路をおくるも紀の関守かうきの月
ふりくるさの月の関すてぬまよ坂山の出をふかんとこそ
めくるとくるう夜の奥をいつも出て侍る猶の月をおさん

嶺雲　生駒山何よつなきて嵐の行きもまちぬ雲をまちらむ
あらし吹峰の夕日あら江のふりにくゝる嶺の浮雲
くもをいふる根の八雲や八坂よすてんとおもへ松のよゝふの雲

原上行人　旅人の袖の夕日も影清く草ふかぬ野路の篠原
ゆきもすきてさ人の手の原を分ゆくとりんやふしのあさき風

旅宿　足をいたみ出けりやとの新まくら跡のとしつまくたてる里人

山旅　宿もなくむかふ山路よる日落て雨の下ゆきふかき嶺の松風

野宿　いさ枕まくらに草ハ結ひて深き風たまらぬ空の人乃やと

野旅　ちるをさやかよみをよ仮寐をる野花の錦うちなかし行ても

野風　みなとふく風まはのちりかやすたつ乃風のやとりてもや

遠樹鶏　ゆくくるまのさうひの古梢ほのかに其の鳥乃ねらをこの本

橋苔　川よくる山のかけうちかみふりく渡らぬ橋を苔よふさきゆ

松　みちぬるも松のすゑぬるにハ花もしめもやとみてそるとり
えまてせぬ人かへのことみえ八松のことをふあいりまほそ深きこと

軒松　さむしさを穂の山の松を世よまつせ果し八ゆめしかなし

山家　庵しめて我世の人の思ひ入し跡もなく／＼雲うつむらん
花の咲葉の落るまゝにて秋とちる年ある山の奥かな
かくてすてあひにあひぬるにもしらぬ宋の袖さへ麻の衣
身のうさも昔は山をたのみけり奥のさみ（柳葉）そおもひ絶けり
山里にまよふ人やなからん小柴のさゝしとさすまでもなかりけむ
峯の庵あるしを人は尋ねしろのみよその一むら
我庵のおなじ嶺のかけもしも月をこそ見ん人のかよひち

山家松　誰とをか木こる山の松のたね生かへ根の千世の子

山家懐旧　おぼえつゝ今をはじめのすみかの雨のくもかすみも遠

山家橋　山川のきよくながれにかゝりゝ世とうき橋はまたも絶なさ

遊士出山　月もたゞ出にしあとんかつらきの嶺の聖も世の人の為

田家　庵ふきて門田もるらしおのれ人めはなくて絶なき
山遠き田中の村のかきねちは落き木竹のあるそ淋しき
くれぬとは山田の庵のいほふき小池がゝらぬおくて刈らく

田家懐旧　見ずならん秋田の稲もすゝる身もつらき人なし家は絶にて

田家竹　山おろし風の絶えやたのむらん田中の竹の世々の庭にも

田家老翁　麻もみてかくてふるや山田もる賤の翁はまたてれにも

田家人稀　ひとり刈る（柔）田も誰かすゝむ人もかけぬひは志るかくかゝるらん

田家水　秋やたつ山田の岩井みさくえてかよふむつちよ枝をつゝまる

暁鶏　八こゑしてまつ天とふる声はゆるをもてぬ里やまからん

水に住るなかしかくかすちやうをのかされ時の人ありをそてなく

旅宿鶏　旅ねしてあふさか宿の庭つる鶏まも我のぬさちらしてん（け一本）

鶏告暁天　告るには鳥も思ひ小夜も又いそぬ枕のあくるしのゝめ

鶴有遐齢　まもるさ我をみよとやたとふらんちとせふるみのねかひなりけり

野亭聞鐘　篠やらふもとの嵐を手枕によくそかつるうしのこゑかな（笶なし）

暁更聞鐘　夢の世の衣つゝくる道もさけてさやてあくまての鐘の音ハ

鐘声何方　宿ふりし嵐やさそふよるの枕をめくる鐘のひゝきか

薄暮遠鐘　消のこる影のあハれなるかなやる末野の寺の鐘の山の世

古寺　櫻のもみちに月をやとしてかへりさの寺より西にかゝる白玉

法のなきゆうくものを手をへて流のしおるしるのの古寺

山寺池　水きよみ影にうつしの松ならぬ尾の門のうしろに入乃いけ

山寺　しらふのとおきつゝ孫の山寺ハ孫によふまもののをきさ月に

かゝつるいらなかひく谷深く大山のあるに人もおよはす世に（おとも一本）

古寺滝　法なるにやみちのかせもおとへて流るよ峰の滝の白波

暁雲　夫見えはもの露つまれのつきの雲と消へてさもさへちるつく（く一本）

曙雲　里をさき林の鳥にふへ流るをおもてはのかくれ孫の横雲（ぬ一本）

暁　我袖をしきみつむ夜ぬまして明や暁おきの涙あるらん

きも身は暁おきも枕くく見まて涙むすかくきてよそしかな（の笶一本）

暁山　明くる夜に山の雲のきみさこ一の嶺や雲かくれつゝす

薄暮煙　川によやくつゆつものむしろをとむふつまなしろくえりにふつるゝ

めくりする里とみえしハつひの夕の煙なりけり

旅行

武士の箙たくしも頼ひ出てこそかくふしたれ
かへりみる人の末も東路の雲居はるかにかゝる雲の下道
まよひきて秋ハいかなる宿かりむ
おちこちの人のこひ衣むもゆかくれの宿やとふらむ

旅行夕

夕暮の舟ハつなきて人もなし大川原にや旅枕せむ
かへりみるみやこの夢別し旅ねのるよなよな雲

旅

馬にもひ鶏なきてたむ人の出立あさて里に旅立る

旅宿夢

旅ねする夜半の枕によそにかへる夢の出し
椎の葉もちらぬ山路の宿のうき夢をやさしき宇治の川風

たのむよのさの枕の夢ぞえさく旅のそふうきかけしきの袖

旅宿夕雨

いかに旅人夕のやとをかりそめて人ハかけたる雨ハふるとさぬ

旅宿聞雨

雨の音を月にまさるやまつとみのとめてもふくハいふ袖やまし
ぬれの秋にまさる旅ねの夜半ともしけ今日のこの坂の下いほ
思ひやるまさるとやとの秋風に人なきやとの夕暮の雨

旅宿嵐

旅のとこ夢にハ見えぬ嵐かな都ハ今や嵐ふく覧
あしかきのまくらの下に床浅く麻あくなる草のかりふせし

海路

もろこしの浦をおひきてみちほの清ぬるまゝる小舟出ても
とつてかへつての人も見ぬ浪のよるもあまりて
大船のいかりおろしてかくて沖中ふくハ秋きさ祢ぬ風ちるとよ

川をのき浪もぬるゝくまもなきかよりてこそかゝる沖つ舟人

あこかきに求らはやぬる人魚人の袖のこなとのひのへのこゝに船

海路鳥　大舟もちゐさ浪にみえあをしおきのかもめハ波に浦つ

海路友　風よりもあらき舟子の声そのまふきもぬ浪路をまかせつゝ

く教文浪のぬるみなとめてくりおほつ人ある船もさしく

海路（旅一本）　（類十七）おきつ風あらき波路の夜つゝに舟よおそのいくさきぬらん

湖眺望　にほの海の沖の小島の岩かとハあまの釣舟をおろせハ

かちの波立さへ人もみえこそハ松を鳴やむするう浪

磯浪　岩こほるこゝくる浪のよせれをうらめしかつゝ舟るさの夜

海上雲低　遠き人のりほられぬる袖ともみかへまとにしも雲そはれる

月はるゝ一の浦こそ帆をみてうき雲をあらそふ白浪

蒼海雲低　浪よゆるやま塩風に行はほとも行帆もおちの沖舟人

鷺立汀　浦風のいさなとるとやいつさへきハの鷺の眠りもさまハ

河鷺　川風よみの毛ふかせてさ鷺ハ雨（の本）ふりぬ日やつれなるらむ

くるゝ夜も秋をたらく川かせよ志つかのかゝぬる鷺の一連

里ちかくあくる川とのみのあとつるるとられ（ニ本）ハさそたぬる

白鷺立河　むかえる堅川の鷺の一つはたにちらぬおくさにて色くらき

すむさくる鶴のぬる川のみなはらよおのまさそいさ人白鷺

長河似帯　舟子の花のおひにまのつゝくをちこち山川乃つ浦

水郷　民の戸のまつをみるもあまりに人浪もあらそやせむ

身は多くて宇治の橋姫ことぢに誘はむひの寺の鐘に傳ふを
こぼすは舟のさまつを川むかひてこちをやまぶのつき橋

河邉鳥

かはすは沙にくよりて古川やの岸にあるいさへる鷺もや
さかる所る洲にあるたつも打むくまゑはなかくの川上の松

江鳥

門の浦のをちにみ舟の跡も見えす波の汀を出て
人の世は根をきかさるそらに波にぬ舟のさしくる浪

江鷺

山川の古江の杭のくちをかくをひえに鷺るかせみる
あまくひ入江とめくる白鷺のあしてみるさは杭の一本

船

ゆくさ浪風をよそにのくの蘆と今のへくやさくを

望遠帆

沖つなのみくまもぬとくれは帆の上に日影をのせて舟そ出くる

おきつ人の舟人さすれ帆おろしつあくさ塩風くむらし

漁舟火

くれぬとし汀の杭のこまよりいでくるよその浪のいさり火

行路市

世の中は市のかりやの旅やどりたえやはつまるゆくもかへるのたつ
たちならぶおの家々ちかくてかへるんこの市や市女の笠をかさねて
風さえみなかなる人もみなよそにのみきく旅市のあち酒
吹おろすあらしもさわぐ山本の雲よりもそる辰の市人

古御路

みし人のなきかおなじる古道にあるはなるもなき道芝の露

古御草

古てのちに宿やかれの跡のえむなしき野人すまゐのくさつ
ゑかせよそさくさはたえたるみし世かすそふるつの蔓
はまはまの右をたちそえるあめそめ川の浪も絶のし

みなかみにまさるおほゐなる川の水筋ハしらぬほとも流れてそきむ

海　春の色もかゝる時あるしほのさとのうるとみえそてし風もまし

水郷芦　あしつのゝ世ハ葦を刈とも思ぬなにはその延せのいさりひ

水郷煙　たてならふまきの島人いとなみさせる布ふくるをを

谷水　川せよ又ちるやさくら谷みさのぬさも花とちるらん

水石契久　みなきおくせつよみとるまり八道こゝろさ世のんともまさ

澤水　只一すち流れよふかき雲の葉に生る小菱むすあし

澗水　流よるまりてみ緑の松のこのかけ之深きいその下かる

苔深き谷のふかりとせきとめて山の雫やふちとなるらん

晴後遠水　かゝつる雲もなく晴きて底清川よれくまる影の一むら

湊よりおきつあら川よりのの流るゝとのふかくてもしらのま

水郷鷺　なかるゝなよそ浦風ふきそ日の入江の川もたつさへ寸なき

寄水雑　何かせん魚なき水ハ清くとも世よ友のいとひをさてをハ

濱楸　むかしつ住よしの浦の濱楸清き河原の友をとふらん

古渡舟　あるやなきさる汲むの風子の音をなの世よおきつ舟人

かへるみる流ハ昧そまち絶るくるせとの子舟

ぬさまつりこつ深をまつ汲のやよあひをとる舟人

延ゆ小舟もの波の枝たかまくりのゆくへとふらむ

橋雨　苔深きあの橋しおもきを亂よいそく雨のあしの跡

宇治ちしの下ふかくかくむる余舟のまよし斗のゆやとりして

川きよみ山のまかくたつ虹のおとせぬ橋を渡る旅人

旅人渡橋

今朝のむら雨か川もとにわたりさえくるさの旅人

見わたしもはるかぬ旅人のこゝろかはぬ橋をこして

わたりくる駒の跡の川もに深せりかぬまもつゝむ人

橋

うかつかむさの渡のしるしをもさらに見ゆ物のうち橋

岸頭待舟

さし待くるむかひの舟のおそきにも人のこゝろもみゆる川路

述懐

いとゞ人いつまでのみとまなくて老の身のはかなきもそのひとつ

うかりける影も人はある世の老の浪さへ待つにぞすゑは流るる

敷島の道なまじいにて二十年あまりに老てさらに勝負のわかれ

玉のをしき世をへてほそくなる月のみ心の影は身はかくて

敷島や道なる中つゐあるときこゆやまとやまとことのは

老の後さの身のさかわの浦に打よせて出る舟は

（老ナレ）むの波五十の後にむくろともみかきあまたに及やぶれむ

老やもる人にも世にも限なき涙とも八折ておもひにて

あれ神人のくものよそ世にあまた人かりもこと島の道

なかくも我とくらとなくさめて旅やまもるらむ世なき

老後述懐

なまきえて人にましるいとなきくらしぬ老の後を

老をいとひ世をとしよそこのもちかけ道かくてやこらん

いつまで老の身ちらん身をつくしきよし此世の浮にはまさも

獨述懐

敷島や此道世くれゆえぬ人のこゝろもかゝらぬなくしは（うる 奕）

きよまさる身はあまたゝひし杖のへにすてゝさる老の浪かな

老述懐

人やしらぬ我やむかしの身をすてゝ同しうき世をすまぬ身ならん　名类

むかしよりなくさむ事やなかりけりいつまてかくて身のすまゐ

おいぬれはよし心のみかくいとものはしまる世のはしむ小

寄木述懐

足曳の山のさくらかけ老木とや濡むる世にあらて枯らん

こゝにしもすかくてたてんさまを杉の木の八しほ濃さ濱風　八类

寄河述懐

しつむさえさなき嶋のやまと川なかくを世にはおもひそ

暁述懐

小初むらしもおもひてさめしそのをあかつきの鳴らん　抛一本

懐旧

あな嶋の久まもしく日は暮ぬかしくその我身はなる

きてなるとは志るとけ一こゝろこつとおもひぬとおもひて何人も覺

みしもかしかへりにけりうきよの過ぬる老や昔のかたみならん

身はふるくあやふき関をこゆるやらくいくのまの浮橋

とのもに人の袖ゆる昔を八年とせ世にまよひける

思ふつさつてもみも衣その時はしるぬむりの涙とふらん

暁懐旧

むかしみしあまさの人の俤もせさき秋床にさ残の月

老後懐旧

涙をもなくさめにとえこかとさましえしいのしし小　类十し

閑居懐旧

月やあらぬむかしの人の俤もとめる宿に其の松庵　も一本

寄灯懐旧

よもさらす世るて灯よは世のこのうちをみきもさめらん

寄花懐旧

松ほとやらてさしは侘人さく昔の風とむ花にさたる

独懐旧

つれかしや春のもまてて昔とは志る人まちにほてそ老けり

さる人なき衣笠のこちくかむかりの人のむかしとそなる

寄海懐旧 ちかきあまの手なれの海によつてさてしかしむかしをとふもなくさめそかな

春雑物 山桜むかしの硯のうみの上にちらむすみの花そさそひけむ
あまの心いつの世の水より色はそめて詠めゆかん

春人事 まちや夢路かへしよそにぬるゝ内にみるまくれかゝぬ花そ惜
さはかしの道も行かへりもさそはゝおもへはちかきかな人家路のかた

對鏡悲老 老ぬれはなかるゝとしをうつして文むかしのかゝみの影に涙落て

夢 ぬるうちもとくのこゝろは神もうれしけれとゝ夢を告よたつ像
円 みてそふなたまこ髪よかゝひてうちさいん夢の行かふる説
円 晴のほかさいはなのむかしのあく声のまに秋むかし夢も絶まつこと

孤夢 奕十七 あふくめてさむるかるこの中をつよはしつのくさの出るところ 奕
なかく人こそ絶ぬる夢の浮世をかへのたゝなかのまくらをそつまにさ なくさ

憂喜同夢 うかれ来てもたのむも夢の浅川わたりとめぬ浮瀬のうきかく

閑居 庭さえく鳥の声く日もまちれら林おほれ風の音ぞかな
うかる人さあれの松の風をこなたぬ日おもくて谷のかはらぬ

閑居木 身をくれ宿くもたのむつかしこのむかしをしき山風
いそてかく我を思ひ木きなれ庭は人もおとさを人のとふかん

庭竹 まもらひつる庭のあやはおつきえこと立てるさにあれ竹をうつし

古郷竹 百夜のうてなやあれる宿のそとの一の竹の世ゝ乃こゝろを

雨中竹 友やうきこゝろの雨にあそつてゝ松の風なき中のさて語よ

竹不改色 松のすゑそれかはらぬ呉竹の本よもあれ心とおもひてそつかに

窓前竹　窓のうへに南の月をさそふなる小竹か星のをのむら竹

海邊暁雲　よこ雲をまつの緑に引せなく浪にうかるゝおきつ舟人

海畔雲　浪よくるおきつなからに浪にゆきかへるむかふ雲さへまよふ一村

海上雲　空の原むかひの山のあとなきハ雲まよひける浪のうへの雲

眺望　浦の舟よせくるやしら濱のしほの松原さきの花のしら浪

浪路なき遠きのさかひ筆の海ふかく緑の松の村立

くるゝ野のこる夕日なかめやる人のゆく山風あらき雨ハふりぬ

江亭眺望　芦かものさのふなのかたへよりあゆみ出る島江口に舟あまたさそ

春眺望　家やのをちこちのまとたえくふなのりて出る春の川あさ

窓灯　かけくもみえかくれゆる灯にあらしの雨そふる夜半の窓かな

閑中灯　くらくふかき文あかくなる灯の消まくとさ夜ハ深くらく

学ひをしれるのみのくらきも見るハかくれやまなみの窓の灯火

出ぬ人ハうれ灯の光法をかゝなる夜半の秋よそて見ゆ

浪の影もさえかすかなる窓の雨ぞと軒の風へぬよハ（ほとく　類一本）

灯欲消　ゆらし消なんとしく光まの影の影くらくさまくてハ

窓雨　くらきよの窓うつ雨に我そほめハうつゝ音その音して

春筆　百紫も咲かゆるやまその海さかめし筆のつとめ人ものにし

春糸　新葉のこのえハたるゝのもいとにまかれあをみ糸

春旅　みをしれぬ人よとふらぬハ旅路もやしきすそのゝ（さ楽）

春灯　まとのよのみかゝかゆる灯のかさくへの花の夜よなかつまり

春莚　菱莚しくあさとりは花人にちらさしのちよの菱の縁さ

春車　宇治川の車にかくしりへと春なきそいろ水もめくりきぬ説

杣川筏（異本ナシ）　杣川やおろし筏のさほに流るゝの花の行そなりけり

苔莚　山姫のまつ花むしろ苔なしき深きも苔のむしろにあはれぬる

暁更鶏　夏の世を八度八るの身くもこゑ出さ孫ハ聞人もなし

夜涙餘袖（落葉）　よもすがら昔をしのぶ涙にやあまりて袖にあまれる

寄天祝　君かさ天をむつひても君をハ千代といのるなるそ

磯浪　よるころくるさゝなみよせ寄るさの波もたつ浪のうきさゝる

釋教　一つかに法をうつしたる中なる法の花のころみそ

ちゆらん人のくにも照月やさしの三る歌よ生あるの空

おのつからほくらにぬるよみな百の佛のみなときなり（之変）

あさきみるのゝ三ゐ孫のそのむ人のくつよしもそれそり

くもりし一日一夜よとしよおろし法のさゝの空の月の雲

露おつる一のさをとてふかくのくのちやむしちる字

雲浮野水　我さえく一村さるうきいてく雨すそくれ野への浮雲

湊頭旅泊　浪まゆるきさ孫の袖のみなと川夏をとてあへて枯浪

半夜旅泊　ちゝぬさしきかたちを浪の枕にや夏浪もすてまてさゝらん

磯まくく浪よ月おちち鳥鳴しましておき我のさよ舟の浮

羈旅　ちるさるさきの里を夜ふかく出でし旅行人のあまむ浪あハ

さり舟のまよひし浪路よちらくくるや日も中々汐のぬきの追風

竹

胡竹よならひわり竹のかくれぬきおく園にきこえて涼しさ

このをとふよりてふかき(しのゝめ)竹を手にとりまし清のくとをそえし(み日上)

旅宿憶都

露ふかきを旅ねはつゆに明ぬるの風子の枕よのこる月の行

山亭人稀

山ふかきむ鳥獣をみてそきゐる人のことなきは行きる世を

嶺林猿叫

秋もまた木のもれなき梢に落る月に猿叫声

猿

つかのまの鋼の猿のさかなとも庭のおもはみえなる世なれや

岩根をさかなき木もなき山中の一本の枝にまたらやるらし

太山本の枝のこつらの谷をさりきてきらく小猿を手なれ

文まさりふかき流つきるをみる山の月にしさるの一声

釣漁火

松陰に関とそへてや漁士の光のうちさくおなつの島

老愁年

七十にいたるはまれの身をもちてあまし八みる世の何を愁へむ

社頭秋

あきはまた鳴る神はいかなるちはやふるみやさの森に廃の鳴らん

古寺鐘

暁のよなかのあきらかにこゑ絶てしらぬ嶺の西におりける

暮林鳥

むら鳥ぐらの梢にこゑのむろきさ川尔によるしかりしおらぬく

関鶏

明しらぬるはふもとをいつとてか関路はたゞ夜送るらん

旅宿寝覚

まくら添む夢さえて枕の月をめみる夢をあてて覚る床

杣山

杣山よ生ふる木のおゐるこゑの身のまあをして思ひさへしらんぬ

み山路やくるしき峰の杣の人のやはそのころしく

人くまかせる木のこ杣山はおほける末の世をそしらむる

杣檜

杣山やまくらの梢のまたみともあらぬわすとは身をも思いはて

杣木こゝる山のひのきの杢をきまり日毎に人ハ行てあやまち
杣人の入山口の桜の木原きりもあさぬおくそしらるゝ

杣木
うき世をハいつゝの松本絶えも思ハつまれ多くそくらん
いつ入むうきハまさ江の渡手こえ杣本川へさ力ありせを

暁遠情
ゆふまくれ行くかなうらのもさうむまきて江のむつしあつせハ

秋釋教
みちくかく吋やハあるらむ秋の月くまみえさすてるかくそれ

羇中海
坂くるまの入海舟もおし浪よるそそや浜路ある説

春秋野遊
らふよちるなつてし野へ出て手折よろ七種の花

寄花幽思
いつあらん思ひをむすは八たま桜の世のうきよ乃宮

寄花釈教
ま毎よ花ちいもてとく法のくるゝてちるあし心

みるまちる人のまちにて手折ても花そうつらぬ什よしも舟へ

寄羇旅花
白雲と成らしの下の橋え花のなきものたゝしのちてゆかさ

寄花雑
雨風もをしほの桜さへのこさまほハをあかつ夢のある
月の影なひけあめまつゝし一の侍の千代浪こ乃ちら浪
むと待世ハもちもるとさ木の本の袖よ月に秋風そへて

春古郷
花あらよみしさくやその花も夜しあきやおもよろちの古へ

春古寺
夕霞むすもつもの江よ立ちつめぬる八袖ぬのおよりやけ

寄木雑
たえ日思ひそれて此世とさ江舟の名さへ杉ぬる京つ浜遠

寄衣雑
人をハ深きよいつしむつまかるかちの衣ハ名よつ出しても
杉ぬて苔の衣の名よあるも人の忘れまかゝるとさそえ

寄枕雑　せきかねしなみたの雲をかきやりてゆく枕の上におきぬよもすがら

寄苫雑　あまの家の苫の下にもうつりこぬ名をさへいはむあはれなりけり

寄船雑　うきせにもおもひそめし（そ歟）早川に舟さしのほる延喜の比の御

路苫　苫の下に旅をとふまん人もなしさハるともなくぬれのわすれのせい

菱島のそによせつゝあまぬ苫の袖なみた（さ一本）をしほの名をやたてまし

浪洗岩苫　さゝ浪のよせてかへりハ流川におちぬ苫ハ下にむすひて

巖頭苫　松かね峰の岩ほにむすふ苫や雲の浪まのもしほたれん

松老澗底　深山木のさえたハ花ふりたれとあはれと谷の名にはつゝ

薄暮松　暮るゝ日をよへの浪の松にある松のたくひもさかゆるのもし

名所松　（歟ナシ）こゝまさむかしを深よなほさりの人はおほさの松のなのも

同　風なくぬ君にハ咲くる身ハふかぬ友とし世をしる竹の末に

山館竹　山かげのいさゝむら竹吹のせる嵐をたよりのまくらにさえぬく

窓竹　いつとなく世のうき節をはなれつゝ身に窓の呉竹

呉竹を馬にかへつる古言をおもひ出て窓の小さゝ

山家風　世をすてし人の庵のさゝの戸をたゝきてすさむ風にまかせて

山家獣　なれそめる山のみさきを招くても（と歟）見えぬきくさの庭のとなる

山家夕　さそみ捨ん人のみるひをいつかれもつらくすてしこの暮のまに　字

山村烟細　山ふかみの里にし糸の末にもけふりのすゑのたちなとのな

山家人稀　あらはへきさとに人もあるとおもひなされハ

田家　かきねをもふかくしておきつ人もなし山田もるやうなる

雨そゝく門田のをしねむら鳥のおくてにおしてなくかへるなる
山かけのをはたの池にすむかはつおきあまり仮庵の床にも秋の露
秋の田をかりそむかりしもつちなる露をあきおもひて仮寝

田家鳥　雄の田のむらすゝめつゝあるゝ縄をひく庵の戸にかけてうつて
江田なる世のまろやのまろねをかつはしてやるは何とむ
みな田かる庵の上の松がえにほのさしそふたまのくれ相

田家興　苅しほの稲穂おしなへ里の子はいなむしろの袂そたつ
くれゆくまゝにおきてものむすひの露さえぬ秋田刈人
かる小田におつる落穂をつくる子もてなれぬ秋の山本

田家見鶴　あし山やまのかけやのきの戸をあくる田面にたつさなそ

寄杜旅　枕とも結ふくさ露なきをむ里はなき此の杜の下くさ

羇中衣　旅衣きなれしふりもはまにとほさん天のかく山
いたつらに秋から衣むもとてたえやまし
むての山

羇旅雨　やかてむつの下にふりしき山寺にあそも衣もやまほしてぬらす
雨の下ハ至らうちの雫さへたくさゆるみのかさやま

旅泊　いねむなくてるよなく大舟のとまほかゝてとまり

旅泊夢　くさまくら旅のよもすみ一夜やあやの舟さへ荒き浜風

泊雨滴蓬　うちもねむ世ハいぬ事て舟はかる雨よみのとかさね

江雨　風そよく入江の芦もさはるのみのかさよるうくの雨

瀧邊鳥　むらさきの浦よ降りたつるのつきてもぬ浪の白波

海邊鳥 うかれとふちとりの入江の夕汐ハ波まてさえゆくあまの村ゐる

山家鳥馴 鳥なれとふくみてし世もみえぬとむさしいくなむ山の奥に

薄暮述懐 身をそえおもひ暮るかたく秋ゆふ露の消るハそれ山の下柴

寄風述懐 我風のなをと世にてゆくすなる松のこゑのも人ならぬかへてそ
いつるかなむくもるまくらむの孫ハ風のすゑさるつのかけ松

寄水懐旧 逢月もさえまく氷のうへの床いくめくるともかひえさむ

寄春懐旧 うきてとて咲よあひぬる昔を我おもふのもの哀む

孤夢易驚 竹のそのうてとてさとき小松に風とかうつの夢なさる

短夢 ゆめまくら八花のやうくやさしうまし孫ふらぬ夢のえくえ覚え
夢見えくれる後も月ところまて夜のもしめもやすし枕よ

またいふこゝいのあるゆめとみつゝれ覚ぬはきる現とも

古人談夢 月そとよちゝをときまの海よ人ならはみえし夢のむかしと

朝観無常 見もはてぬ風のまへの露ゆゑあへの桜一花もなし

上陽人 きえ孫ロ身ハ老なき園のうちもふくさき雨そく窓の灯
人なりぬ身をうつもりのつゝめくふんやとめてあすハやをぬ

山榊 榊えのかくふ嵐神さひくくも衣手ふかさよみえくも
かくかの神世のしみのとつ枝ふくくもかゝるまさられの月

神祇 行よしの神もさつるんるはれぬきそ竹のよのそのまそ
みつけ人まの神の和らくる光そやてやまとちてのめそ
ゆくる世の我らゝみる神とあつて佛ともまたは涼も語つて

はるかに跡をたれてし恵みの宮をあふくきの神やうつくしくも

情人の行きけるのもりしるしなき神そなへてむすめのさかひ

ありて神拝いつきての後神世の跡をたへせぬ宮のうち

社頭水 みたらしや神のいかにかくてこの水まさる末も清く

社頭松 星しるき松とこそみえ清きのつきてみかぬ玉は鳥山

人もみなかりのさかりをもしんとやとさめちの宮居の松

宮神祝 ましぬるも君か世の為やまもる神のちかひの宮柱る近

宮水釈教 かくよりも世のさかひかたる名をなせる四の一の水清くして

嶺上暁雲 ここ尾もの峰おさのほのつかかくて此世をかけてやすらふらむ

述懐夢 さのみのこのこほる世の一もちとんとさ夢のうつつ

述事 教をぬもしとこえハみふれそふる世の中には恋

草庵 誰もこ世をいつくその庵とハみるらむ跡をこの世ハ津々

その庵根をつる家の手に置こえを久てをと々

あり山あしやともれもすきハその面のふもの一の尾

夜雨 よるのこのくの庭にかふるにふきよく人や袖ぬれる世

神のうるものやのこのもの袖をふる秋しあれ行んよしか

麓紫 門ちも山風ふく白露さくをすそのまゝ置かて山紫

庵むすふ峰ものまかなきの世をとふ人はあはれしも人

路芝 かきつもはらは路をめくるにしいのふ露のあらそかくらく

門松 誰もむその人をまてる松の本松の門はるか若ふるくしき

山中滝音　おくふかきみ山のいはほもこけむして落る谷の水のおと
きこゆなる寺の軒ばもゆふやのぼる山路の滝の音かな

澗亀　川浪のよするふちのまに住亀の又淵に入岸の人おとに
山川のふちにしづまる流木ともみえて亀ぞ浮ぶる

樵路日暮　里遠みいそぐやつま木の柴をおひて入日とともに帰る山人
いつの間にたちかへるらむ柴の木に入日の影をおひてかへる

樵夫　けふもまた山路のやがてきさらぎさへかへる山の木こり
上るつまぎのしめる世のことはりもしらぬ八十のおきな
水清き谷のかげにすみなれて山家おきて柴をおふ山賤

嶺雲　さらでだにみねのくもゐに山を雲やくもらむ

いのちある時こそ見め風にちる花をしむもかなしき坂路

胸消是非　世の中の人のこゝろのおしなべて消ぬるものかはやみぬる

心静延寿　うき事しらで静なる心をゆたかに世の中をはなれて

夏衣　夏衣うすきかたみの袖のうらにおもひをかけてせ

夏窓　すむ人のこゝろの月のやどるらむ窓の夏やまりの影もとらん

夏莚　人はみな我のことくの莚にすゞみする夏の夜すがら

夏船　さゝなみのよする川瀬の風すゞしみちの舟人

夏棹　月やうつる波のまにまに棹さしてさゝぬ水のうへのゆふぐれ

舟中遊女　まつ人はあらじと思ふ舟にまくらさだめぬ

岸上傀儡　あさ川の岸にもさだめぬ岸のうへの枕かな

冬　櫛　黒髪もさやてかつきさやたく旅の行にみえしまそのをとめこ

冬　鏡　くもれるかなや妻へてて行きるの夜の山もかゝみをうくる雪かな

冬　莚　おきゐてく人なき床の月影にさゆる莚をまくあらしの音

冬　衣　さよ衣うすきむしろやおふらん暁おきのさむきさむしろに　八类

こゑ人の衣うつ音やさゆる竹ハそよやさやくそこのうらかせ

冬　鐘　霜よりもさえてきこゆるよの雪おもて待のむすこさえ

冬　夢　冬の夜は戎歳さえて我戎かきさき夢路に立かへるらん

伊のさむる枕にあかし夢のつゆひちまちてのくらうく

独おもうつの夢の関もハとてぬるよのうつみ火のもと

冬　舟　うき身をもたのむ渕あまや冬川の舟なかくへき氷よ遠

冬　市　ゆかつらしの市の葉つむ里のくもりもちらぬ氏よ

冬　旅　出ようも新まいて旅人をまつらん里のくもりなか

冬　祝　神無月いさよふもえしきみよとのの日のよその時かつて

冬　人事　紅をかき採手枕さゆる冬の夢解くつせをまあへく

冬　暁夢　かりしきの神の氷もよふきて結ひ夢の夜の風の

冬　雑物　沖かまもぬ渡のてらよそ歌よのまきさまその嵐をしる

おくやまをいろよおくかみのまううつまぬをよまきさるらん　逢寸一本

春　床　閨もうちかへる営もおきいつる花の床やこうき

春　莚　家も川その桜のいなの莚夢ハときかるもち乃舟をさ

春　舟　ほのくるよまをもそふや延ち小舟もうよしさしてつる下を

秋鐘　夕くれのあはれはしかもきく寺の入相をききてそしる秋の夕せ

秋笛　身にそしむ更行月も秋風の声流れくるよその笛竹

秋夢　さてしも猶六十の後の秋の夢人のうつつを我はのこつらく

秋人事　身にしむもみ果ぬ夢をみるとてやさましはてらむ床の秋風

月前遠情　めくりきてち里はかはらむすひかへる月そさやけき大和もろこし

月前眺望　雲たゆる紅葉の末の山きはよく月のいつくる浪のよるせか

月前幽情　世をうしと思ひてしもやむかしを偲ん昔の人の袖の月かけ

夏車　なる神の音にまかせぬるみちのへに小車めくる夕立もなし

夏旅　入日さすその露に夕もすゝみむすふ夏の宿かるもしく

夏山家　大山風松のこゑきゝて宿のゆふ夕枕してあかぬ山の秋も

夏枕　ふかく来る清水の岩枕むすひしもへたるらん棹の夢

夏懐　川の瀬は浮きよるへて捨らん我ものちあさきのゆふつく

夏述懐　一えなる身をあまりけり手のまつやあさの衣の夏の秋風

夏閨枕　夜のまの夢のうき橋たえし枝は揺やすみしき枕あかさりけり

羇中川　くまもぬまふるきの川もとき紅れ枝さしてやまのさかいそみん

橋苔　苔延きくもたえぬ道てある九十の橋よりよ渚揺せん

古寺路　名もちるし宝の道さし山寺のあなとみえ八つらぬる

松年久　見もつねに人もそれほともむ苔まさり同し古木の川上乃松

寺　澤きさことよもの堤をさまへて雲なるらくまもえをれる

山寺鐘　みやの京は川上の澤のあとふくるのえもゆめやさまされん

野寺鐘　聞遠き寺の鐘の音霞にかゝる夕乃ひゞきそへめの袖

古寺燈　九の秋のえだにたえぬる花の寺のともし火をみれば心すゞし

朝海路　友舟はちりぢりにくれ鄙の方のみちゆくも見えぬ波の末

江雨鷺飛　あまつみまどふ江川の雨に梢に波なるや鷺そ群り

白鷺立洲　むれゐる鷺のみの毛をはらふ波風に白き沖つ洲の風

流れ行くあやふき波も白鷺の妹のかげさまよはせむ川岸

暁見漁舟　定めの海やたが別れ舟ともなひてこぎ行く近江のうらの火

山嶺松　かゝる山の峯の松の袖の木の間やさらにこゝろ寄する嶺の松の色

山家水　はなるゝ松のあらしも山の音もさらにしのばしもむ人の袖

河藻　人ならぬまに川の瀬によるむもかゝりそめけむ世にやすらはん

遠村鶏　雲井のよそまで清き籬に鳴くなる鳥の声の一つの里は杉や杉垣

関路鶏　ちるしめや雲のかよふる鳥の声足柄の関の戸は明くなり

暁旅泊　なごりの月をさそふうき枕夢をさそふよるの流れ

旅泊　侘ぬる身はさすらひの浦の泊りたる舟や十の世かさねるらむ

旅宿　雲ゐてふしてとだえん宿の旅の夜やしく露のぬるよの夢は

かへらず旅立つやとのあれしも見ても昨日の花と谷も

古郷　たえずやめ出でゝふる袖のこゝろやすらの見るにや見るらん

懐旧涙　昔をぞ恋ふる涙のおちにけりかわかぬ袖のうらみは

夕雨　晴れまなき我衣手もしぐれの夕の雨のそぼちぬる

島眺望　浪なき行き先の風むかひそ見るやうき波の舟人

島松　海ちかき島も一松や旅寝せん夕波に浦おきつしま松

雲居鶴　立かへる世をも見へしとて鶴のたつやむかしの雲居の人

披書知昔　紙の上のむかしをしのぶ筆の跡ながき世まで見る人

市商客　あきなひと市にまじる人も宝のをかへり見る

夕述懐　暮ぬとてなげく心もみな同じ身は夕暮の涙なるらし

氷御舟　川水に氷やとぢし御舟かな

祝言　静なる御代のしるしは神ぞしるその契りをや

經文部哥

西岡海印寺の僧正廣經ときこえし身まかりてのちのまつり永享六年かの僧の花さかりのころ思ひいでゝ南無觀世音菩薩といふことを一字づゝ上にをきてよみおくり給ひし

なきかけを思ひあまりてよみさして花すさへ文字しれぬへき

むかしの深くる事を落る袖のみなもとやむかしのおもひそ

くらきよりみるにかへるなる花はむかしの紙のうへに

ことのはの花をさへてみしまゝと思ひの雨はれぬれ

むかしの苔の下に清き雲の世をむかへてぞなる

序

せゝの川をうたぬよりも人の世のうきハつねくちるさくらなる
あはれなる松の千年もかひなきをあはれなき花の命に
六十ぢをつくすのまへのむかしまうけ家にハ数をつまむ
わすれふとも忘れぬ年の桜を偲ひてそものゝあはれを
さくらより花の木陰に宿しめて雲を別れ人をおもへ
一月やあらぬ心もひとつの夢の内まてきぬの法のしらせ
永享六年の冬のころ東下野守益之父の十三年の
追善のためとて法花廿八品を題をあつめて懐
旧和歌録之

序品 よもしひのりの光まつてハ世々の昔をいうくのうら世

方便品 数をふく法の道よみゝに塵のたちてをこゝろの雲も晴ゆし
懐旧 法とくハおもくろさるもふこそ心あまりうき世ハあはれ
譬喩品 あはれとみし門を出てハ小車の三ハ一にのると志りや
信解品 古への親やの家ハめくりきて五十年の後の身をそ恨る
懐旧 なき人ハさそ友なしん忘て止ぬ光のなきこの我ま来な
薬草喩品 おのそのみうけゝる雨にめくみの庭草もほの小草も
授記品 まよふ身をさとりちる名とさつき心を宗とむる四の聖ハ
化城喩品 九年のこのえまても千とせぬかミの故の宿のかたし
懐旧 家まもの名とまるなきもも二十年の数ハ年をさ
五百弟子品 かくしみよ衣のうちにつむすそ我ものをのかるるありけさ

人記品　おかしこのみのおろかなる事をしらでみえぬるやうなん
法師品　かすしのとをもちてはやそて出る八十の男の事のたひ人
寶塔品　七つなる法の庭にそ空のよりあらはれ光八月日あらはし
懐　旧　くまもの命もあかぬはるの浦よりむろ世といふまあけ
提婆品　うたくも法のまことの花をつかるよなきされはまゐらせん
勧持品　さまで京つなる枝に身子よりもあまたのとよせんとて出けり
安樂行品　あまもひのん深さはおのつから身をもとまもるすみたりまた
湧出品　翁さひ人のとつめすてとらせともしん八ちりし空の白かく
懐　旧　うつりもぬるに所に八よりやた法まは苔の下に朽さる　世の人一本
壽量品　かきりなくまふしき佛の命そらしらぬ人の世のくろしけれ

分別功徳品　あまけ人百千の救の一つもかく及さん法やなかしきそる
随喜功徳品　くまるとは我ゐる床の中をもこゝのをとふあくやゆつりむ
法師功徳品　まもち読むなれの中やてまかつすまつるとかまちたちん
懐　旧　友みる老さるあつかひふきは時るもこぬさこの浦は
不軽品　かろしめそおこさ同らむ人の花の後も苔のころも
神力品　とくみのそ神の力の十の救をみぬむまなとらぬの行つむ
嘱累品　こさりけるへ世つかつこのもの手の世にけて枕やまさん
藥王品　あさ文もちをとてつるのあきのねを身をやくうちも法ぬ法
妙音品　そ行もさまなるこゝろをまち光るをこのつるさのそら
懐　旧　ひせくさもとかの世はもうき世の人の袖まもつまさ　そひて一本

普門品　三十あまりみつのすかたかへてもちかひの海の底ハ志つけし

陁羅尼品　代ゝかハらぬ法をまもる神のまもりハたのもしきかな

嚴王品　あるかよくすゝむるまゝにたらちねのなさけを人そ思ひしるへき

勸發品　おくりおくかたのこゝろのかよひてもその仏やてをさつくらむ

懐旧　二のみちのさかひや出にけんつゐに一年のめくるむかしを

、永享六年十月十七日ふる道親当ためしに

序品　このよのふまかりしと思ひ出ふとゝや四色の花の下ひも

分別功德品　擣植立精舍　以園林莊嚴

光ともみのくらてれもむの上句ふきやしのそのあら風

嘱累品　玉髪をさかひなそくもたうち孫ハかきとゝて古ゆふむめ

陁羅尼品　十羅刹女

あふくをし十のをとめのかさしにもさかんと思ふ法の花かさ

同九年五月五日藤原敏信おやの十三回忌にあたる

日侍るとくサ八不人ゝにとしめしに（仁一本）

序品　九代のむかしのまゝの花のひもとくハおなし光ともみし

安樂行品　若於夢中但見妙事

ぬる中にみえつる月の影人にかたらんも露も袖にゆらく

藥王品　如渡得船

わたるせやかつことたゝる知ら舟ゆもむの上秋の川ち

普門品　聞名及見身　心念不空過

雲の上の月にしその夜な〳〵をかくぬよもなし

懐旧　十年あまりみつしほ遠しぬれし袖にこぼるる秋の浦波

身をとふ御法の露の玉なるもかさぬる苔の下思ふらん

嘉吉二年卯月十日菅原盛隆父の一回の追善二十

八品すゝめしに

勧発品　當於今世得現果報

我世にはうゑやおきしその秋の木の実の枝をおりぬる

夏懐旧　忘れし去年のみ月のふみの夢みしよりさぬるむとつ涙ぞ

文安元年の秋常光院尭孝父の尭阿三十三回

の追善とてすゝめられしに

金剛経　不受不貪の心を

尾花にも心の下樋もかけつくおのれと人の水にまかせて

秋懐旧　我年の三十とせの秋の夢なれと数もあくるあはれさ（一本へ）

寛正二年五月十二日入道親元故入道智蘊十三

年の追善のためし法花廿八品すゝめし中に

見宝塔品　摂諸大衆　皆在虚空

月と日の光にならふしの雲井をさる孫の空もなれのあるや

懐旧　こその浦の三とせの涙にぬれし袖のなれし友舟もさし

享徳元年三月三日冷泉中納言持為つ法花廿八

品勧をすゝめし中に

提婆品　わたつみの南のうみよりうつる人たつのこやたつのおむすめのみこは

懐　旧　あつらんをみる人のほとけふみぬ世のその花のふるへて

同年四月十六日人のもとめしに

化城喩品　見わたせはみのおもひつきて篠のやとをやすめてやすむ月の影

同十月四日人のもとめしに

勧發品　少欲知足

一枝はいつのむもれさるそのおなしことなるけれ

同二年六月十八日武田大膳大夫信賢朝臣廿四日普光院

のもとにて維摩十喩の内をもとめられしに

是身如泡　うきせにて同し世のすかたをよそにみる流つへの水の白泡

懐　旧　日本のうちにあはれしける人やかはりてもむかしの世をしのひぬらん

同三年八月四日細川右京大夫勝元家にて喜十三

回追善のためにとゝめられし中に 品経一本

陀羅尼品　令得安穏　離諸衰患

ちかひみてをよひもせぬわれもむかしの経の教の心に

懐　旧　あつまりたるも現世の花よりも昔語りの夢そわすれぬ

康正元年五月廿七日伊勢守貞親入道 故一本 真蓮一

回ゝく勧めあつめしに

阿弥陀経の心を

諸法にたへりてさるへき仏のみちをあやまりてとるも御法を

夏懐旧　一とせをおくるとまちぬる（々る一本）夏のよのまはみ夏の晩

同九月朔日冷泉侍従政為親父大納言持為乃一回

とくく一品経すゝめ侍し中ふ

涌出品　後まてもかきつゝるのことをおやとまつのこかひそ法の命

懐旧（有注一本）　思ひしも八十年のうちの三代のまへとそ源の人の被り

同十一月廿五日日野大納言勝光父の十三回に法華廿

八品を將軍家を始としてまつりてすゝめらるゝ（一本）に一品をすゝめし中ふ

囑累品　うちつきあれこそのこらぬ天つ空わかなるしらのいろさ

懐旧　かくふまも八十とて三のうへ後の消よし跡は年そへのまかなる

同二年九月冷泉侍従故大納言三回追善すゝめられ

中ふ

陀羅尼品　世々をへん旬みののその花そのをかるやをとめの袖の匂

同十一月二日人々のすゝめし中ふ

序品　法のむしろ不經もいらぬ中の光そをまさにさまよかさらぬ

長禄元年十二月二日藤原盛隆勧進すゝめし二十五日

人々一品経すゝめし中ふ

勧発品　當越遠近　當如敬佛

哀傷（有注一本）　かつてゆる月よこの手をあはせても先立むのへまる山のは

多のものそこに残りままをかくかはる木をさる風はうらめし

同二年十月十六日細川右馬頭道賢故岩栖院道親卅

廿八品経勧進よみしに

陀羅尼品　無諸衰患

ちよみよ光よくにみてる日のかゝるまことは法のちからを

懐旧

おもひ出ぬ昔しものうつりゆく袂をしほるつゆのまとゐに

同しこゝろある人のもとへめしに

信解品　まよひこし道よりかへりて逢ひみる五十餘年のちへの月

懐旧

みをもちぬ人をまつとも袖ぬらさせるの涙のむかしの昔に

おなしく人のもとへそしよ

授記品　中空の月まちえてそ四方の人白くるものゝ光をもみる

懐旧

ゆかりのをみつくは思ひ袖の涙のあるしをとふ泪のみ

丹鶴叢書

人の勧をあつらしに

随喜功徳品　世皆不牢固　如水沫泡焔

さくめにやりをみよかくろかのみなれく消るとこ衣世の中

懐旧

ちりひくもとまりぬ露をあすしのはにおくらし風も

さそふもん

圖書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan